

寺田寅彦

二十四年前



二十四年前

ちようど今から二十四年前の夏休みに、ただ一度ケ―ベルさんに会って話をした記憶がある。ほんとうに夢のような記憶である。

それは私が大学の一年から二年に移るときの夏休みであつた。その年の春から私は西片町にしかたまちに小さな家を借りてそこに自分の家庭というものを作つた。それでいつもはきまつて帰省する暑中休暇をその年はじめてどこへも行かずにずっと東京で暮らす事になつた。長い休暇の所在

なさを紛らす一つの仕事として私はヴァイオリンのひとり稽古げいこをやっていた。その以前から持ってはいたが下宿住まいではとかく都合のよくないためにほとんど手に触れずにしまい込んであったのを取り出して鳴らしていたのである。もったもだれに教わるのでもなく全くの独習で、ただ教則本のようなものを相手にして、ともかくも音を出すまねをしていたに過ぎなかった。適当な教師があれば教わりたかったが、そういう方面に少しの縁故ももたなかったし、またあったにしてもめったな人からは教わりたくもなかった。それでやっぱりいろんな書物に

かいてあるひき方を讀んでは、ひとりでくふうしながら稽古していた。いつまでもろくな音は出なかつたが、それでもそうする事自身に人知れぬ興味はあつた。

適当な楽譜を得るためにははじめには銀座へんの大きな楽器店へ捜しに行つたが、そういう商店はなんとなくお役所のように氣位が高いといふのか横風おうふうだといふのか、ともかくも自分には氣が引けるようで不愉快であつたから、おしまいには横浜のドーリングとかいう商会へ手紙で聞き合わしたり注文したりする事にしていた。これは全くの余談であるが、少なくともそのころ、私は音楽が好

きであるにかかわらず、音楽に関係している人々からはよい印象を受けなかった。音楽家からも楽器屋の店員からも、また音楽好きの学生からも一つとしてよい印象を受けなかった。

そのころ音楽会と言えば、音楽学校の卒業式の演奏会が唯一の呼び物になったがこれは自分らには入場の自由が得られなかった。そのほかには明治音楽会というのがあって、このほうは切符を買ってはいる事ができた。半分は管弦楽を主とした洋楽で他の半分は邦楽であった。そのほかにも何かの慈善音楽会というようなものもあつ

て、そんなおりにには私にとっては全く耳新しかったいろいろのソロなどを聞く事もできた。

記憶が混雑して確かな事は言われないが、たぶんそういう種類の演奏会のどれかで私は始めてケーベルさんの顔を見、ケーベルさんのピアノの独奏を聞いたように思う。曲がどういう曲であったかそれも覚えていない。ただ覚えているのは、ケーベルさんが一曲の演奏を終わって、静かに横にからだを向けて、椅子に腰かけたままじつと耳をすまして楽器と天井の間に往復する音波の

リヴァーベレーション

反響に聞き入っていた瞬間の姿である。聴衆は待

ち兼ねていたように拍手をした。ケ―ベルさんが立ち上がるのも待たないで無遠慮に拍手を浴びせかけた。ケ―ベルさんは少しはにかんだような色を柔和な顔に浮かべて聴衆に挨拶した。

演奏していた時の様子も思い出す。少し背中を猫背ねこぜに曲げて、時々仰向いたり、軽くからだを前後に動かしたりしているのがいかにも自由な心持ちでそして三昧さんまいにはいつているようなふうに見えた。他の多くの演奏者と対比した時にいつそう何かしら全くちがったいい感じがあった。

まっ黒なピアノに対して童顔金髪の色彩の感じも非常に上品であったが、しかしそれよりもこの人の内側から放射する何物かがひどく私を動かした。

平たく言えば私はその時から全くケーベルさんが好きになったのであった。もっともその前からその人がらについて充分な予備知識はもっていたのであるが、一度会って話がしてみたかった。しかしなんの用もないのに無紹介で訪問するのはあまりにぶしつけだと思って控えていた。

夏休みにヴァイオリンをもてあそんでいるうちにも、

私の頭の中のどこかにケーベルさんの顔が浮かんでいたものと見える。どうしたはずみであったか、とうとう私はケーベルさんに手紙を書いた。理科の一年生だが音楽の修業の事で教えていただきたい事があるから、お暇の時に面会を許してくださいというような事をかいたものらしい。

返事をもらう事ができるかどうかと危ぶんでいる間もないほどに早く返事が来た。何日の何時に来いというのであった。それがどんなに私を喜ばせ興奮させたかは言うまでもない。

約束の日に白山御殿町のケーベルさんはくさんの家を捜して植
物園の裏手をうろついて歩いた。かなり暑い日で近辺の
森からは蟬せみの声が降るように聞こえていたと思う。

若い男の西洋人が取り次ぎに出た。書斎のような所へ
通されると、すぐにケーベルさんが出て来た。上着もチ
ヨツキも着ないで、ワイシャツのまま出て来た。そし
ていきなり大きな葉巻き煙草たばこを出して自分にも吸いつけ
私にもすすめた。

ドイツ語は少しも話せず、英語もきわめてまずかった
私がどんな話をしたかほとんど全く覚えていない。ただ

私がヴァイオリンを独習している事を話した時に、ケールさんは私のもっている楽器の値段を聞いた。それが九円のヴァイオリンである事を話したら、ケールさんは突然吹き出して大きな声でさもおもしろそうに笑った。私はそれがなぜそれほどにおかしい事であるかをその時には充分理解する事ができなかつた。それにもかかわらず私は笑われても別に不愉快でなかつた。かえっていかにも罪のない子供のような笑いにつり込まれて私もわけもなく笑ってしまったのであった。

次の室の棚へやの上にオルゴールのような楽器が置いてあ

った。それを鳴らして聞かしてくれたりした。

その時の話の結果として、ケーベルさんは私のためにある音楽家に紹介状を書いてくれた。それは結局断わられて無効になってしまった。そうして私はとうとう二十年後の今日まで、ほんとうの楽器の扱い方を知らずに過ごして来た。

しかし私がケーベルさんを尋ねた第一の動機は、今になつてみると、ヴァイオリンの問題よりはやはりむしろケーベルさんに会う事であつたらしく思われる。考えてみると恥ずかしい事である。その時に私は二十三歳であ

った。ケーベルさんもまだそう老人というほどでもなかった。

それきりで私は二度と会って話をした事はない。ただその後一度駿河台の家へ何かの演奏会の切符をもらいに行った事がある。その時は今の深田博士が玄関へ出て来て切符を渡してくれた事を覚えている。これも恥ずかしい事である。その家の門の表札にはラファエル・フォン・コウイベルとしてあった。

全く夢のようである。

言葉がもう少し自由であったなら、そして自分がもし

文科の学生でもあったら、私はおそらく、もう少しケーベルさんに接近する機会が多かったかもしれない。

ケーベルさんがなくなった時に私は昔の事を思い出してせめて葬式にでも出たいような心持ちがした。しかしやっぱりそうしないほうがいいと思つてやめてしまった。どこへ見舞い状を出す先もないと思う事がさびしかった。

自分のような、みずから求めて世間に義理を欠いて孤独な生活を送りながら、それでいて悟りきれずに苦しんでいるあわれな人間にとっては、ケーベルさんのような

人が、どこかの領事館の一室にこもったきりで読書と思索にふけっっているという考えだけでもどんなに大きな慰い藉しゃであつたかしのれないと思う。その人がもうこの世にいないと思うのは、なんだか少しさびしい。

ケ―ベルさんに笑われた九円のヴァイオリンは、とうの昔にこわれてしまつたが、このごろ思い出してまた昔の教則本をさらっている。それにつけて時せみしぐれおりはあの當時を思い出す。そうすると、きつと蟬時雨の降る植物園の森の裏手の古びたペンキ塗りの洋館がほんとうに夢の

ように記憶に浮かんで来る。

(大正十二年八月、思想)

日本文学電子図書館

二十四年前

著 者 寺田寅彦

作成者 宮澤一郎

底 本 寺田寅彦随筆集 第二卷
岩波文庫、岩波書店

1991年4月5日 第59刷発行



日本文学電子図書館